

江戸名所図會 五

浦真太郎  
河崎下蔵屋

津奈川遊園

JL 4  
3218  
5



常盤  
書院

陽明

河崎六郷渡口より向ふ方よりあり東海道官驛の一ツあり  
初程品川より二里半驛舎数百軒整ととて  
河崎の北条家の所領後帳に雑田新三郎及び伊勢兵庫頭間宮豊前守等  
河崎の地名あり又同書大珠寺分十九貫四百文の内五百文を  
川崎は伏せあり

平安記行

河崎より海を渡るに  
長光寺日耀上人の孫傳ふりて  
馬むんとするものも少少  
於河崎より河崎に流とみ  
かきめりての里を  
全

持資

全

河崎庄司次郎高重宅地 其舊地今志らくは相傳ふ高重昔  
谷子住を後違論のりあり此地へ移る住となり又旧地堀内小  
あり山王の祠も此河崎に遷せり

兒玉

昭和九年  
七月六日  
終末



河崎万年屋  
奈良茶飯

力年

力年

按今河崎の驛舎の南に堀の内と字ある地あり山王権現の社あり  
疑ふらるる高重淡谷より述ぶ所の神なりんをこれと次山王の社地  
ありて凡其趣尤違へり又は堀の内と稱する高重旧館の地なりん  
これと堀の内と土人もこれを詳しむるに他日考へべきなり

堀内山王権現宮 河崎上新宿街道の中程より左へ入る二丁半

南より相傳ふ 欽明天皇の御宇勸請せしむると河崎の鎮守

中より神領あり 社司鈴木氏奉祀也 鈴木氏祖先三郎高重と  
り熊野の鈴木氏より

本社 祭神武甕槌命相殿 伊弉諾尊 伊弉册尊 五神合祀也

正月三日流鏑馬神事あり六月十五日ハ大祭あり十三日より  
十六日に至る大祭賑へる其間渡田邑の海濱にある所は旅

所へ神事あり 燒く森と号く所は洗池ありその傍に船の業祠あり又  
土人云此所は洗池にせむ 同書は長八丁の馬場あり新田家より寄附ありと云傳ふ  
魚虫ハもつて所取ありと

十五日神輿渡河の時前へ神幣七柄を持  
物せると相傳ふ弘安四年川畑櫻川左近助と申ある人勅をせり  
奉幣使とて当社に向つて一頃の幣串なりとて当社第一の

神寶とて奉幣使の人名尤不審なりとて 又九月十九日あを角力の伎と  
與仍十一月廿三日ハ八年の市立也 只傳説より記すのみ

洲河原 桃林河崎渡口より大師河原迄の間ありとて田園悉く  
桃樹を栽り故に開花の時に至ると紅白色を交つて奇

觀あり

除厄大師堂 大師河原ありとて金剛山平間寺金乘蜜院と号け  
真言宗ありとて醍醐三宝院に属す 當寺は安置せし大師の靈像也  
大師河原と号け永祿二年小田原北条家の所領 此地より出現あり故にその地を

弘法大師像 弘法大師の真作ありとて海中より出現  
ありとて多佛體悉く貝売相著てあり

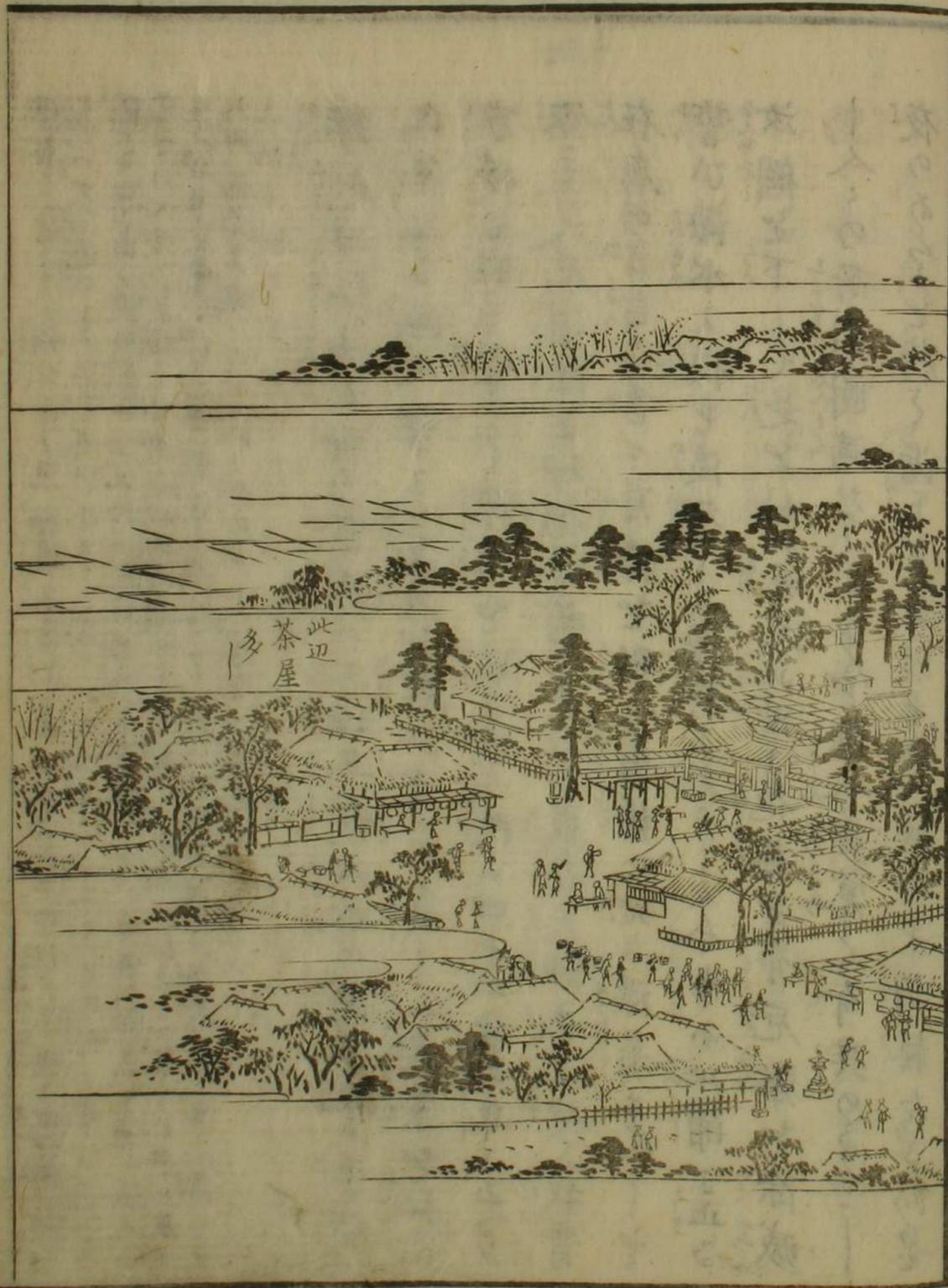
額 金剛山 石川本工亮頼直筆 容殿は平間寺と書せしむ

六字名號石碑 堂前左の方あり石面中は南無阿彌陀佛とあり  
傍に寛永五年三月二十一日雪翁月盛居士と注し花押を  
印せり碑陰は武州江戸京橋紀伊國屋櫻井又大夫三月二日御靈夢の所六郷  
大橋中へ大師の御筆を蒙り此名号法名雪翁月盛居士万人は愚筆を添く



河崎山王社  
カサキヤマノウヂ





大師河原  
大師堂

正五九月の廿一日  
就中三月廿一日ハ  
影供  
あまく詣人  
稲麻の如く  
往還の賑ひ  
尤影



供養と名をす。鑄付より東海道名所記に云く寛永年中江戸京橋に紀伊國屋作内  
として一文不通のものあり酒を造りて業とを作内深く此本多と信仰し常は歩戎  
運ひたり小ある夜の夢中は大師六字の名号を書敷り奇異の事ありある日  
當寺の大師へ系指し給ひ六郷の橋の上より筆一對拾ひ給ひたり夫より大師の教へ  
り名号を書き給ひ給ひ筆勢は類なりとこれハ作内石塔に各号を書き給ひ給ひ  
大師河原に建よりされと外ののみハ一字を以て書き給ひ給ひと云々

縁起曰弘法大師の靈像ハ大治年間此所の浦に住る平間  
氏某なる漁人常は三寶を敬み其家貧しく産業を弘ん  
方便も無く空しく年月を送り迎へ既は四十二歳の年あり  
依り災厄消除と神佛は祈りたり或夜大師告く曰く我昔  
在唐の日自ら吾の肖像を彫り有縁の地は漂着せしむ  
誓ひ海水に投て後久しく海底にありし今幸小此浦に止る  
汝網を下して是を拾へ永く此地に化益を布厄難を除滅  
一人の所願圓滿なりしと漁人夢覺り奇異の事あり  
夜のありを待り海上を見渡せし一條の光明赫たるあり

其所は舟を寄せ網を沈降せし果し夢中に見るあり容  
貌小毫釐も違ひし大師の靈像を得り仍十字を創立し  
平間寺と号す平間氏の号と爾來已降靈應著く常小詣人  
絶るなり正五九月の廿一日別く三月二十一日ハ御影供後仍  
あり給小大は賑はつと

蜂

龍盃 大師河原村池上氏の家に蔵せり往古慶安年間此地に  
於て酒戦あり一時用ひたり盃を酒七合餘りと云  
盃中蜂と龍と蟹との象を描金にせり 蜂ハ龍ハ蟹ハ有るを  
相傳池上氏ハ小田原の北条家ニ屬し仕小田原落城の後池  
上村に移り池上を氏とす 後今の地へ 此家ハ水鳥記に云く酒客  
大蛇丸底深り末裔なり 底深通稱を池上 慶安元年八月江戸大  
塚の地黄坊樽次 茨木春朔と稱す春朔の弟ハ此底深り家ニ至り  
樽次底深共酒將となり 數多の酒兵を集め敵身方と分れ





未廣松



庭中林泉の備杯ありと橋の傍に下戸の葦渡りなりと  
 注せし制札を建たりと酒客宴飲の旧跡を今田園や  
 なる此松も底廣く愛樹やと未廣と名つけたりと  
 此家やと酒戦の頃用ひたりと大盃ありと  
 楠金せりの形を箱の蓋に水鳥底廣盃と題し又左の如くは  
 發句を注せり

大所は多しあそびに格別なりとのあり  
 跡はあやむ

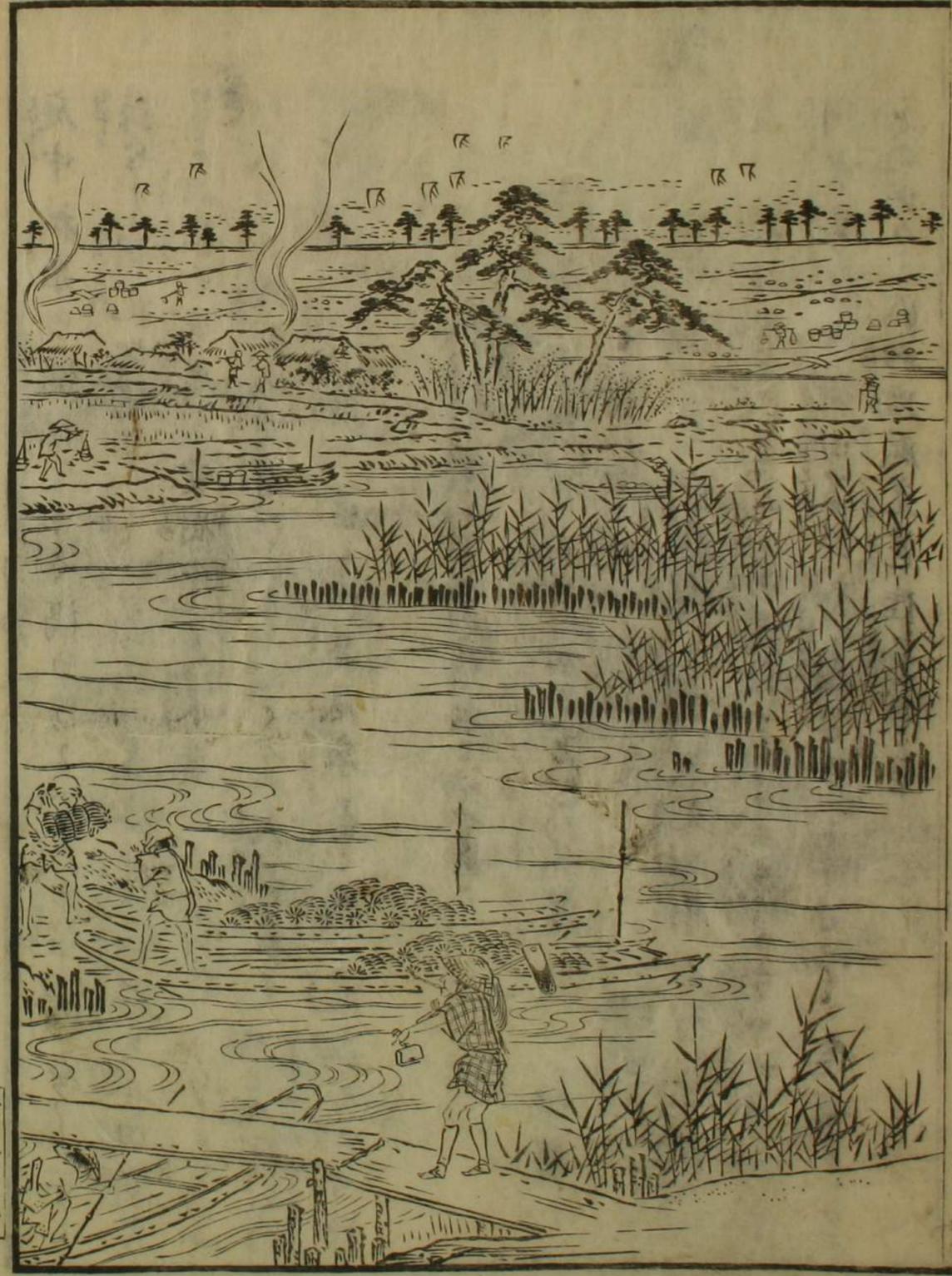
こゝ夢や西瓜上戸能く乃 控

活圖

鹽濱

同所南の方北海濱なり寛文九年己酉叶栗雲  
 及い泉市右衛門といふ者開初なりと云依り今も大師河原  
 川中島稻荷新田等村に鹽を製するを以て産業とする  
 その少くは此地風光甚佳景なりと

河崎  
汐濱



石観音堂



石観音堂

同所平間寺より七丁斗り南あり天台宗に

しき慧日山明長寺と号し本堂ハ石像の如意輪観音之

故は石観音 毎月十七日道俗通夜系籠を靈龜石ハ門内左の

垣の傍にある所の石の手水鉢を以て 土人おぼゆる此石ハ往々享保

十八年の秋海底より出付 捧げ揚ぐ候は此大悲の威神かきまをあり同七月晦日竟は堂前より

擲し水をとて一くし

新田大明神社 堀の内山王の社より耕田を隔て七丁斗南の方

渡田村の道より右におあり 渡田背ハ例祭ハ七月二日なり土俗

云毎年正月元日と七月二日の 暁や必軍馬の駒く音

せりあつとつと 相傳河北矢口村鎮座ましゆを廢子義興公の神

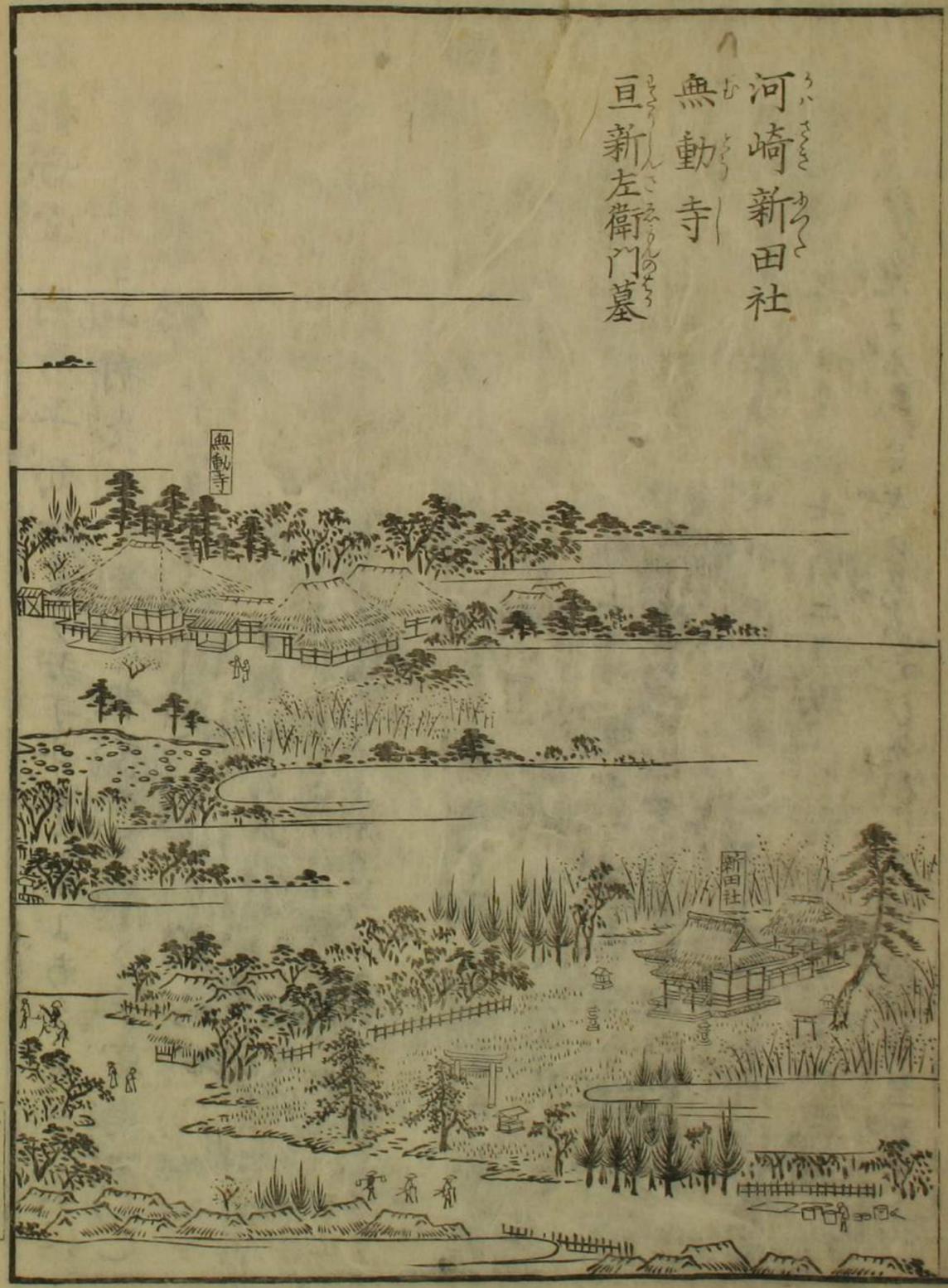
本社祭神 新田左中将源義貞朝臣の靈なり相傳義貞

公延元二年丁丑閏七月二日越前國足羽の里比戰ひ利

あつて 竟は主あき矢のふさひひくハ骨鯁の臣亘新左衛門



河崎新田社  
 無動寺  
 巨新左衛門墓



尉早勝無念の涙を拭ひて不なる深泥の中を捜し求む  
義貞公の差添の名剣と七ッ入子の明鏡及陣羽織等純  
三種をゆく此地は携へぬり幽室は安し朝夕給仕せり  
公の生家も異なりなり早勝終は弓馬を捨てる人に面  
せむ一向静座し餘齡を養へ然る里民等公の徳成  
追慕し三種を早勝は乞ひ清潔の地を求め孤松の  
本の土中埋蔵し廟を営て新田大明神と崇まぬせ  
此地の鎮守とせり浄閑國の後祭田等を附らんとあり  
其孤松今ハ  
拈てなり

太平記曰越前國足羽合戦の条下は軍散る後氏家  
中務丞と云尾張守高経と云越前の前は参て重國「登  
新田殿の御一族と云き敵を討き首を取て作ぬハ  
誰とも名乗作らぬハ名字をハ知作らぬ馬物具の様相

順兵ともの尸骸を見り腹をきり討死を仕作れ  
何様尋常の葉武者めてあ〜と覺る惟是を其死  
人の膚は懸る惟は護めく他は血を未あ〜ハぬ  
首は土の著る金禰の守を副てそ出〜りる尾張守  
此首を能く見給ひ〜ある不思後や世は新田左中將の  
顔つ〜似〜所ある〜若〜左の眉は上に  
矢の疵有〜〜自鬢櫛をひく髪を搔あげ血成  
洗き土を〜〜落〜是を見給ふ果〜左の眉の  
上は疵の跡あり是は弥心付て帶〜二振の太刀をハ取  
寄〜〜給ふ金銀を延〜作〜一振を銀を以  
金膝纏の上は鬼切と云文字を沈〜一振ハ金を以  
銀脛巾の上は鬼丸と云文字を入らる是ハ共は源氏重  
代の重宝め〜義貞の方は傳〜と聞ゆれハ未〜の一族

共の帯へき太刀あぢ非きとるふ弥怪るれ八層の守を  
 開きくくん後あふ吉野の帝比御宸筆あく朝敵征伐之  
 事睿慮所向偏在義貞武功選味求他可運早速之計  
 略者也と遊されとて切ハ義貞の首も相違なつてもなり  
 とく尸骸を興よ衆せ時衆八人よ昇せと葬礼のあり  
 往生院へ送られ首を八朱の唐櫃よ入氏家中務を副く  
 潜よ京都へ上せられたり云

新田山成就院 聖無動寺と号し同所一丁斗南の方同一  
 側よあり新田大明神の別當寺ゆと新義の真言宗  
 六郷の宝幢院よ属せり本号不動明王弘法大師の作  
 ゆと義貞公護持の靈像なりとのみ  
 左の方相傳義貞公入間川陣を布ゆ頃二童子の枕上り  
 立ちひ瀧倉退治の心願あつ八巨田の里よ安置しある所の

御靈権現社

巨新左衛門塚



姥ヶ森  
栗生左衛門塚



不動と崇信せよとなり依く義貞公此靈像は誓願を  
こめく竟は高時を討亡しあふとひ

巨新左衛門尉早勝居住旧址同所門前半町あまり西の方道  
あり左よありと此地ハ元弘の頃巨新左衛門々来邑ありと則此

地は住しつりといふ早勝没するの後も里民其旧恩を忘れ  
しと一祠と宮建し早勝の霊を鎮く御霊権現也

崇敬を傍は早勝の墳墓あり言と三尺計此石乃  
層塔なり

姥ヶ森 成就院より七八町計南の方海濱あり堀の内  
山王の旅所あり西の方へ續き馬場の形を存し

栗生左衛門尉忠良塚 同姥ヶ森より八五丁計西の方海濱に  
臨み方八間斗竹藪の中より有り

有る馬場ありと云ふ洗池ハ森の中よ  
五輪の石塔ありと云ふ相傳あり

忠良卒ののち後早勝朋友の信を以て其靈骨を此地に埋藏し塚を築くことあり

瑞龍山宗参寺 河崎驛砂子町の右側の向あり 洞家の禪刹中々末吉の宝泉寺に属す本寺釋迦如来八座像あり

一尺五寸計の唐佛なり 取士ハ文珠普賢の本像に似て

作者詳あり 當寺古ハ藥師の別當寺なり 相傳ハ當寺を

佐々木四郎高綱の香花院なり 頃ハ砂子一邑悉く當寺に

食地あり 閑山ハ臨室玄統和尚と号昔ハ濟家の

禪林なり 鎌倉の建長寺に属せしもの後天正に至る

小田原北条家の功臣間宮豊前守信盛といふハ

所領役帳ハ間宮豊前守所領武藏久良岐郡杉田江戸川崎小机末吉東

郡小雀入西郡富屋三浦元文珠坊知行の地等とて六百九十八貫百廿二文の

地を領す 佐々木四郎高綱ハ遠裔なり 寺境方八丁と寄附し末吉邑宝泉寺四代の住持自山長老を請て當寺の中

奥閑山と曹洞宗に改む 信盛法名を瑞榮院殿雲谷

宗三大居士と号す其石塔ハ當寺佛殿の後の方銀杏樹の

下に存 元禄年間幕下間宮家より宗参大居士供養の爲其米邑

川崎小田村あり 寺領の地を寄附せしなり

按ハ當寺什物元禄四年辛未正月間宮家寺領寄附状ハ間宮豊前守

信盛法名宗三といふあり 又當寺閑基の墓碑中ハ雲谷宗参居士佐々木

前豊前守入道源康信と鐫むあり 信盛の法名と宗三ハ作り康信の

法名と宗参ハ作る猶疑ハ然れども寺号と宗参寺と稱し又康信ハ當

寺の閑基といふ味も康信の法名ハ宗参なり 疑無きふ似たり

高綱護持の本寺ハ如意輪觀音の本佛あり 座像一尺五寸

あり 作者詳なり 別堂ハ安んず 本堂の左あり

海采山養光寺 宗参寺より四丁斗先の方砂子町の道より左側ハ

あり 洞家の禪宗あり 宗参寺に属す指月和尚閑創の寺院

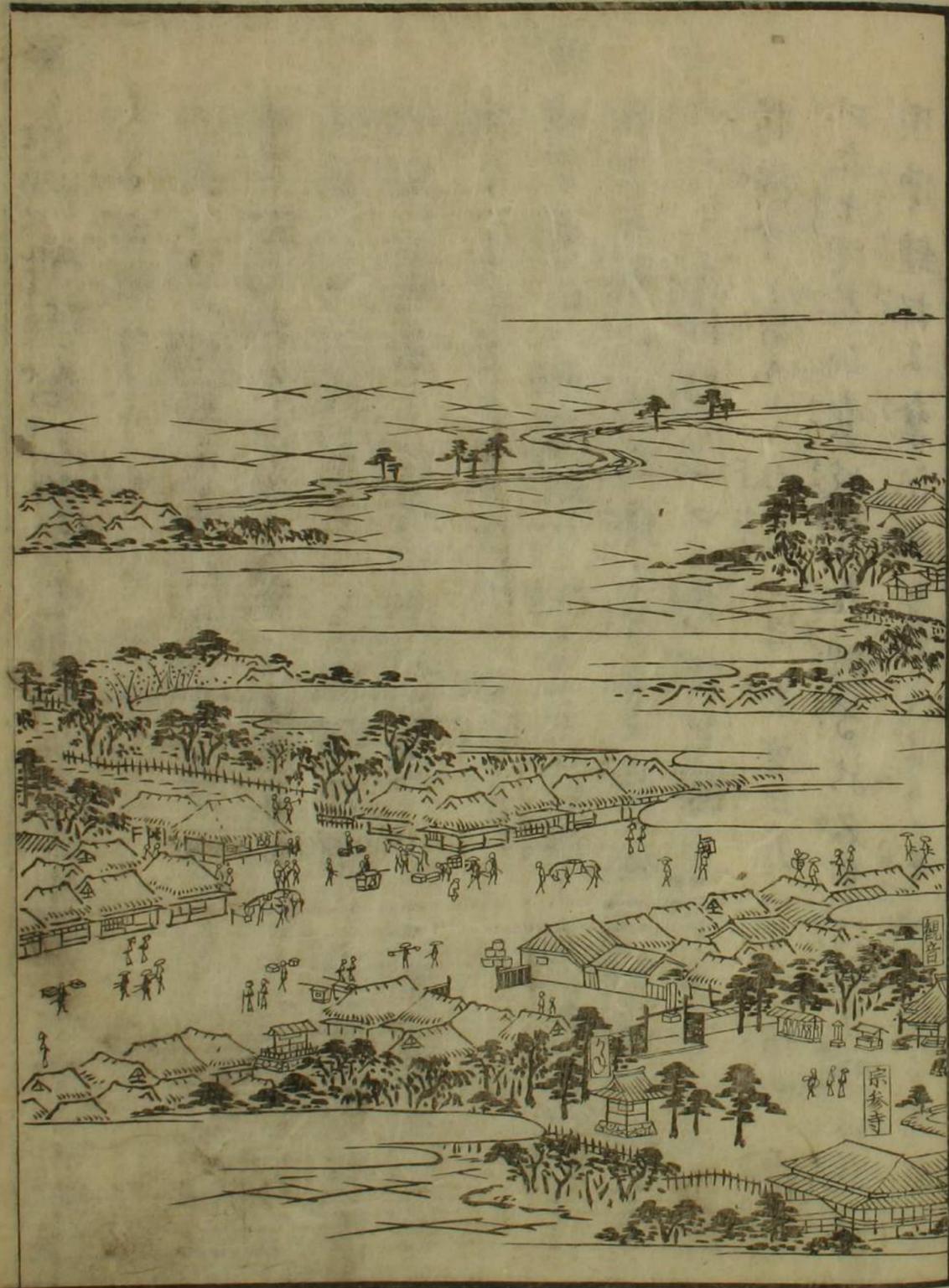
あり 本寺藥師如来の座像二尺五寸計あり 延暦六年丁卯の

と 此地の海中より出現し 延暦六年丁卯の

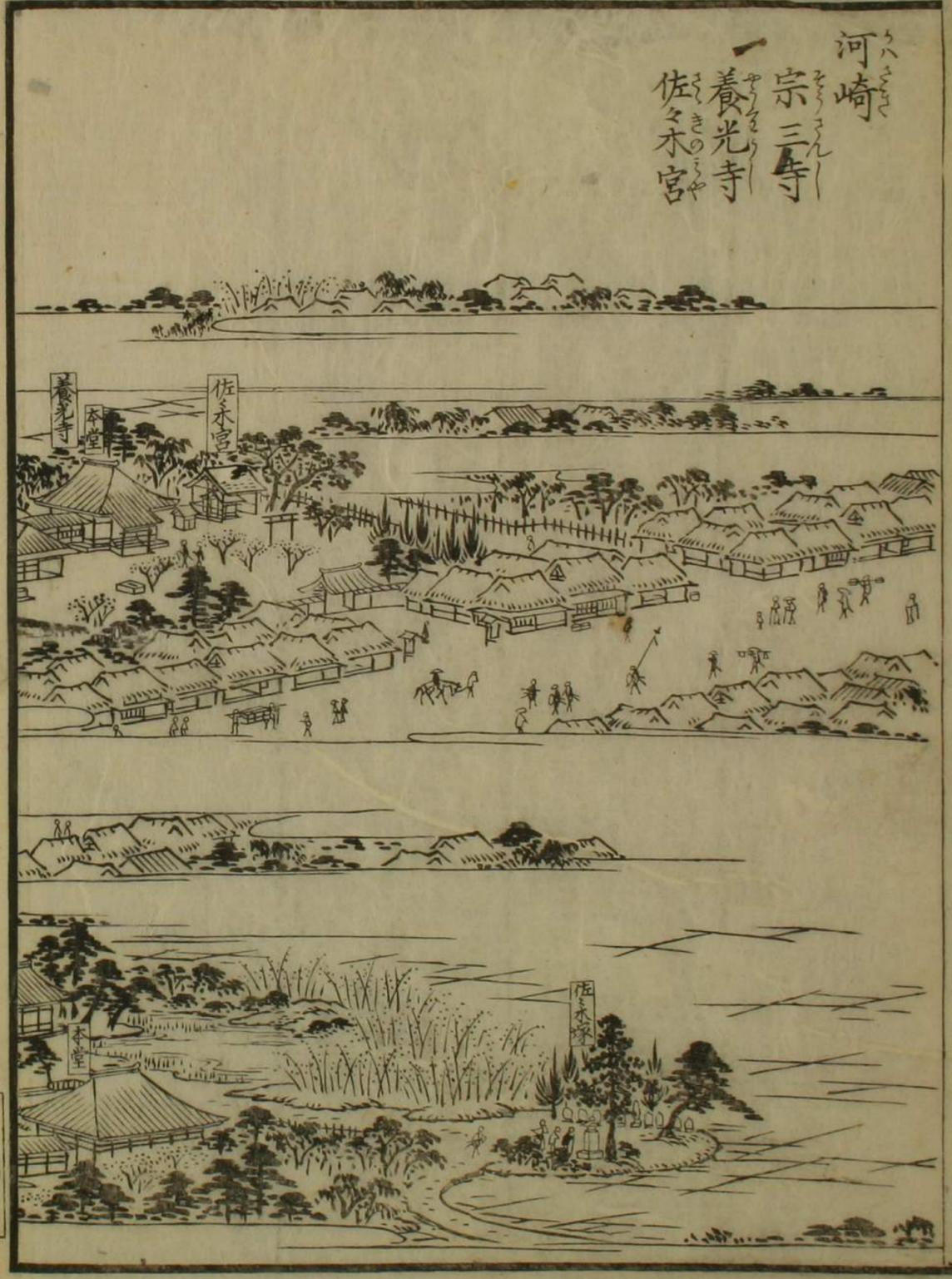
寶の砂子を集め 其上に安置せし 砂子とて此地各發せりと 此靈像

昔ハ宗参寺の本寺なり 後當寺に遷すと云ふ





久崎河  
 宗三寺  
 養光寺  
 佐々木宮



佐々木明神社 養光寺の境内本堂の右に並べし此地の鎮守  
なり宗参寺より奉祀を祭神近江の佐々木明神は相同  
しきとの相殿は高綱の靈を崇むるとぞお供し高綱  
鎌倉右大将家の命を蒙り此河崎の地は山王宮堀の内  
に建立の事ありし其縁を採り間宮信盛先靈の  
神徳を追慕し江州の本祠を摸し此地は當社を創  
立せし云九月十九日を以て祭日とす

勝福寺 舊址 其廢跡今知るべし然る南徳望陀郡奈良  
輪邑の東坂戸市場と号する地は坂戸明神と稱す侍  
社ありし其社前は一口の梵鐘を懸る銘は武州河崎庄内  
勝福寺とありし弘長三年癸亥二月八日大檀那禪定  
比丘十阿及ひ壹岐守泰綱等名を注せり按し乱世の  
頃陣鐘杯は棄れ取りしより其地はありしを

按し東鑑は文應二年辛酉此年二月改元ありし弘長と号し五月十三日  
甲戌今日書番の御廣御所はあつて依り本堂前司泰綱と洪谷  
太郎右衛門尉武重と口論は及ふと云々然る時を鐘の浪上泰綱とあり  
東鑑は記を承り壹岐前司のうなるとし此泰綱は四郎高綱の甥ありし  
信綱は二男なり

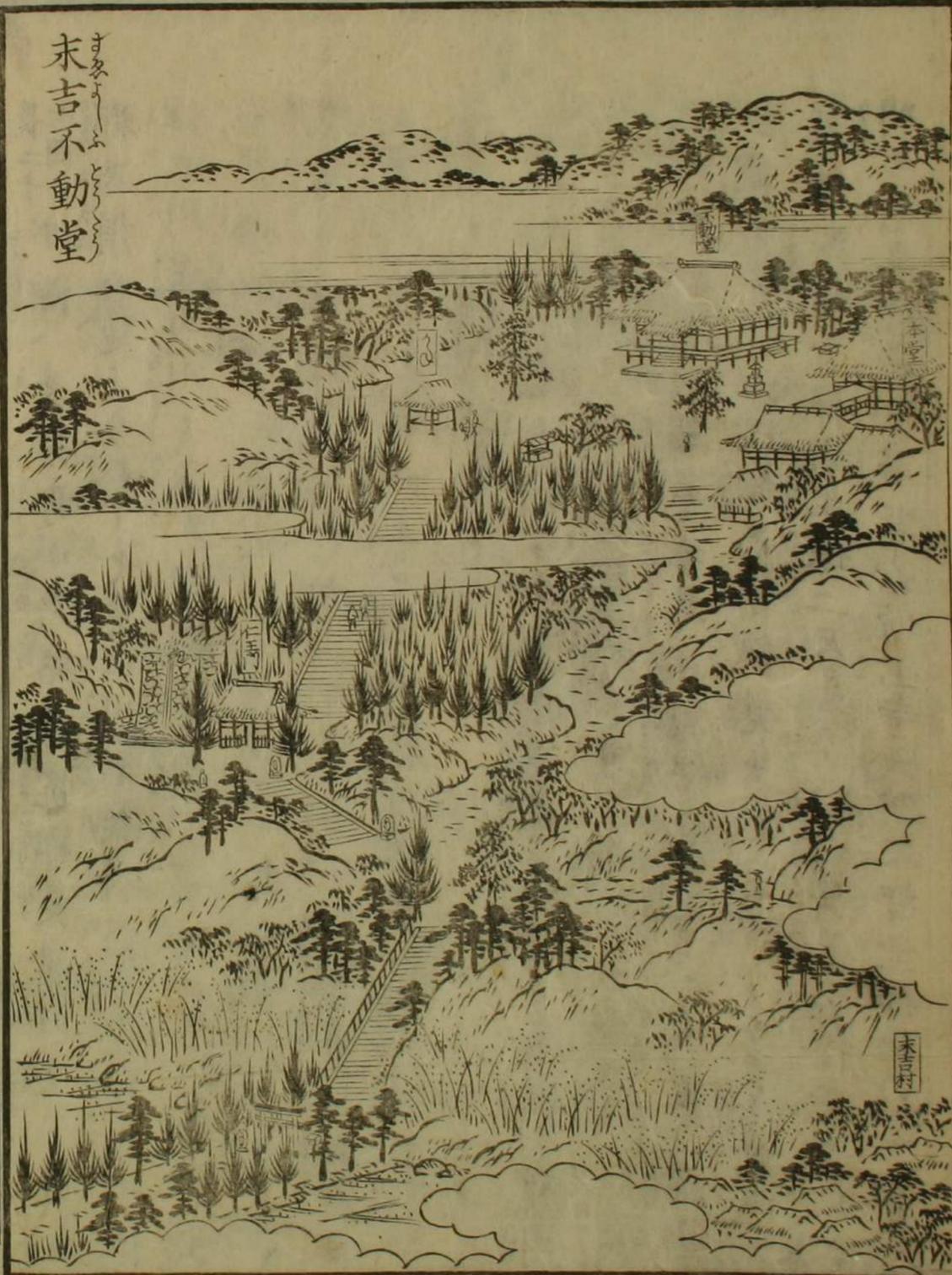
觀音堂 市場村街道より左の方一心山專念寺といはる浄  
刹は安置せり本堂千手大悲の像を寛朝の作御丈四寸  
ありし紫式部の念持佛なりと云傳ふ兼應年間近江  
國石山觀音の辺は老嫗一人住り或時西國移脚の僧  
愚藏坊照西といひ沙門此老嫗は宿せし夜老嫗の  
病悩を救ふを報とて此靈像を授く後故ありし當  
寺は安置なりあるとて毎月十七日ゆき系指の人多し  
本堂は掲る所は額は一心山と書せしは鑿山前大僧正  
雲外の筆なり

鶴見川 海道は架す所の橋の号も又鶴見橋と号す

市場観音



長二十  
七間 水源ハ多磨郡小野路都筑郡長津田及ひ橘樹  
郡馬絹の辺より發して恩田川早瀬川矢上川鳥山川佐  
江戸川等の川々落合ひ鶴見村に至る故は鶴見川の号  
あり梅松論云元弘三年五月十四日鎌倉方討ふとく  
武蔵守貞將大御所向ふ下総より八千葉介貞胤義貞  
と同心の義有と攻上る間武蔵の鶴見の辺に於て戦ひ  
打負て引退くとあり  
末吉不動堂 末吉村あり鶴見邑海道より北七町斗  
西よりあり明王山不動院真福寺と号ひ天台宗ありて  
品川常行寺は屬を本尊不動明王を安置をその像を  
坐像あり六尺餘あり慈覺大師の作といふ本堂あり  
十一面觀音を安んず坐像二尺斗り行基菩薩の作あり仁王  
門の額真福寺と書せし増上寺大僧正智堂和尚の書あり



末吉不動堂

秋田城介義景旧館地 其地今ある處は東鑑に仁治

二年十一月四日 將軍家武藏野開發の津方違とあり

義景武藏國の鶴見の別荘に渡御頗りて壯觀ありとあり

醫王山成願寺 鶴見村の内ふて街道より山手へ入るる三丁

斗より曹洞の禪刹にして寺尾天光寺は属本寺釋迦

如来を作者詳くは開山と聲菴聞大和尚を号して

薬師堂小安まゝ所の薬師座像あり七尺斗り古佛と

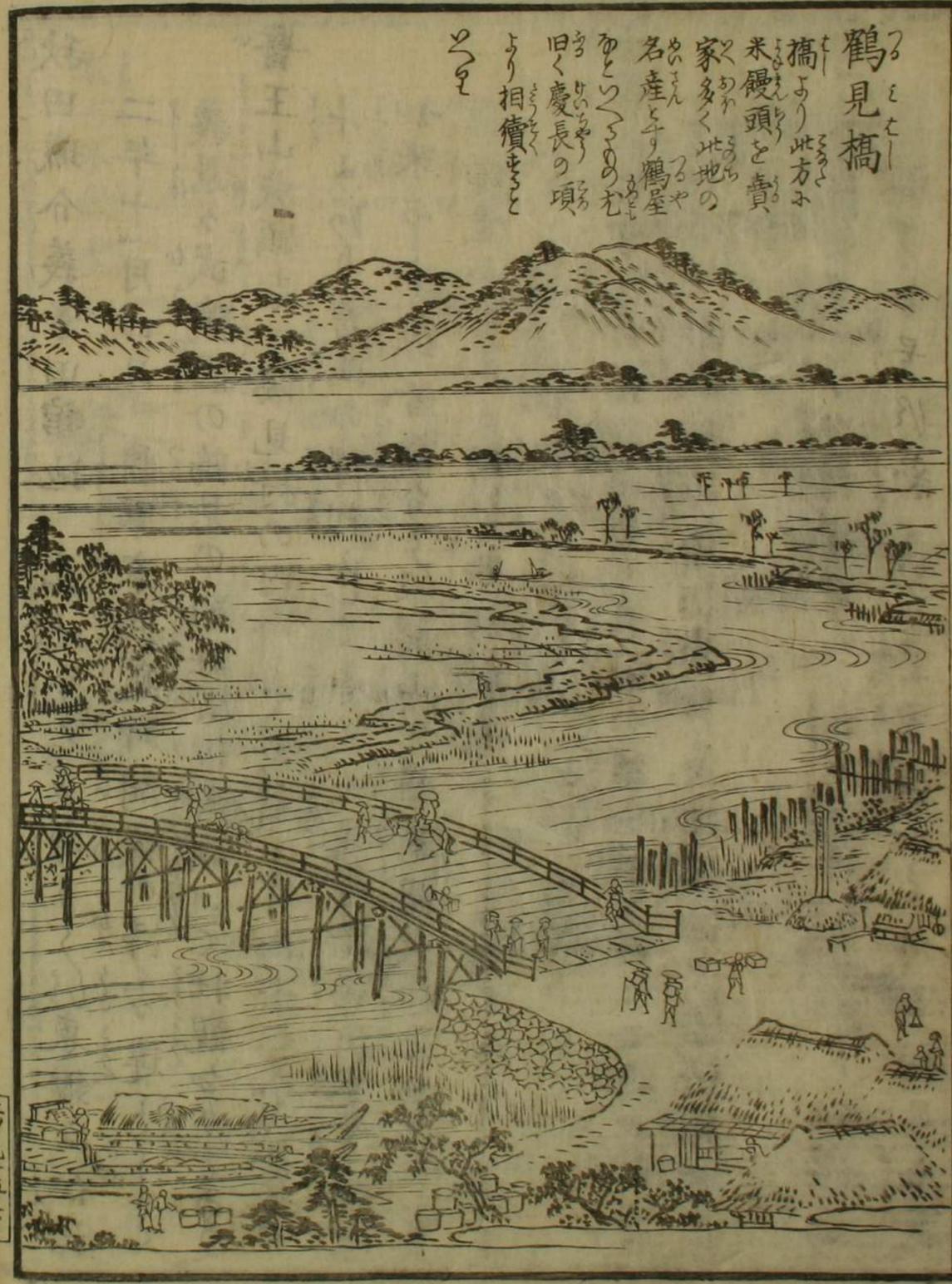
してとむ小作者知まはしむ

白旗八幡宮 白旗村あり義經の靈を鎮る所と云傳ふ別當

と神奈川能満院兼帯は来由と拾遺江戸名所圖會ふ

子安觀世音 子安村海道より右の方北岳あり子生山

東福寺と号は新義の真言宗あり神奈川の金藏



鶴見橋  
 橋より此方  
 米饅頭を賣  
 家多く此地の  
 名産とす鶴屋  
 名産とす鶴屋  
 旧く慶長の頃  
 より相續まこと  
 といふ



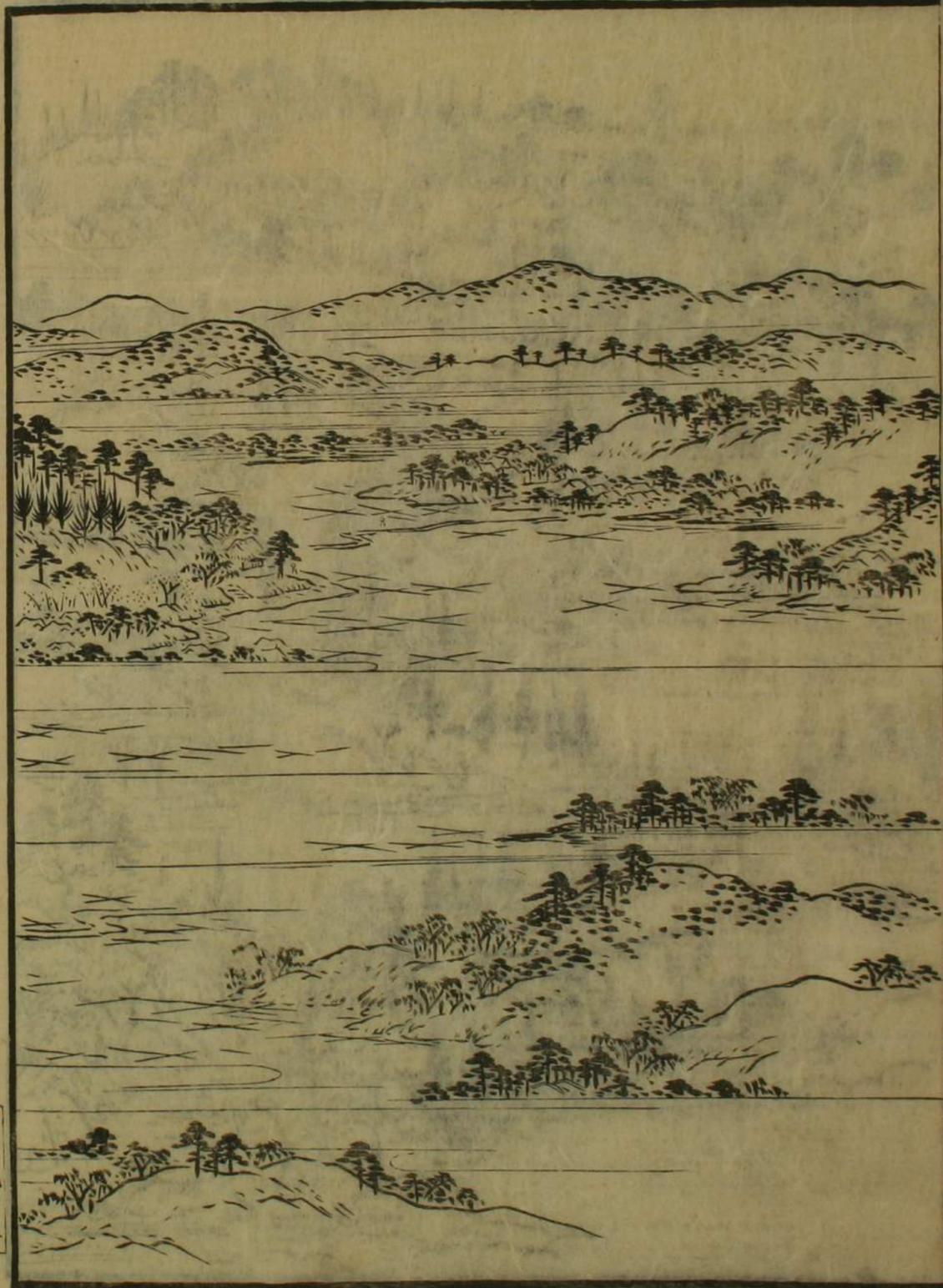
生麥村  
あかき茶店

生麥河崎と  
神奈川の宿を  
立場なり此地  
らきとら水茶屋  
享保年間麴  
用きあり梅干と  
齋き梅漬の生  
姜を商人往来の  
今時の繁昌





白旗八幡宮







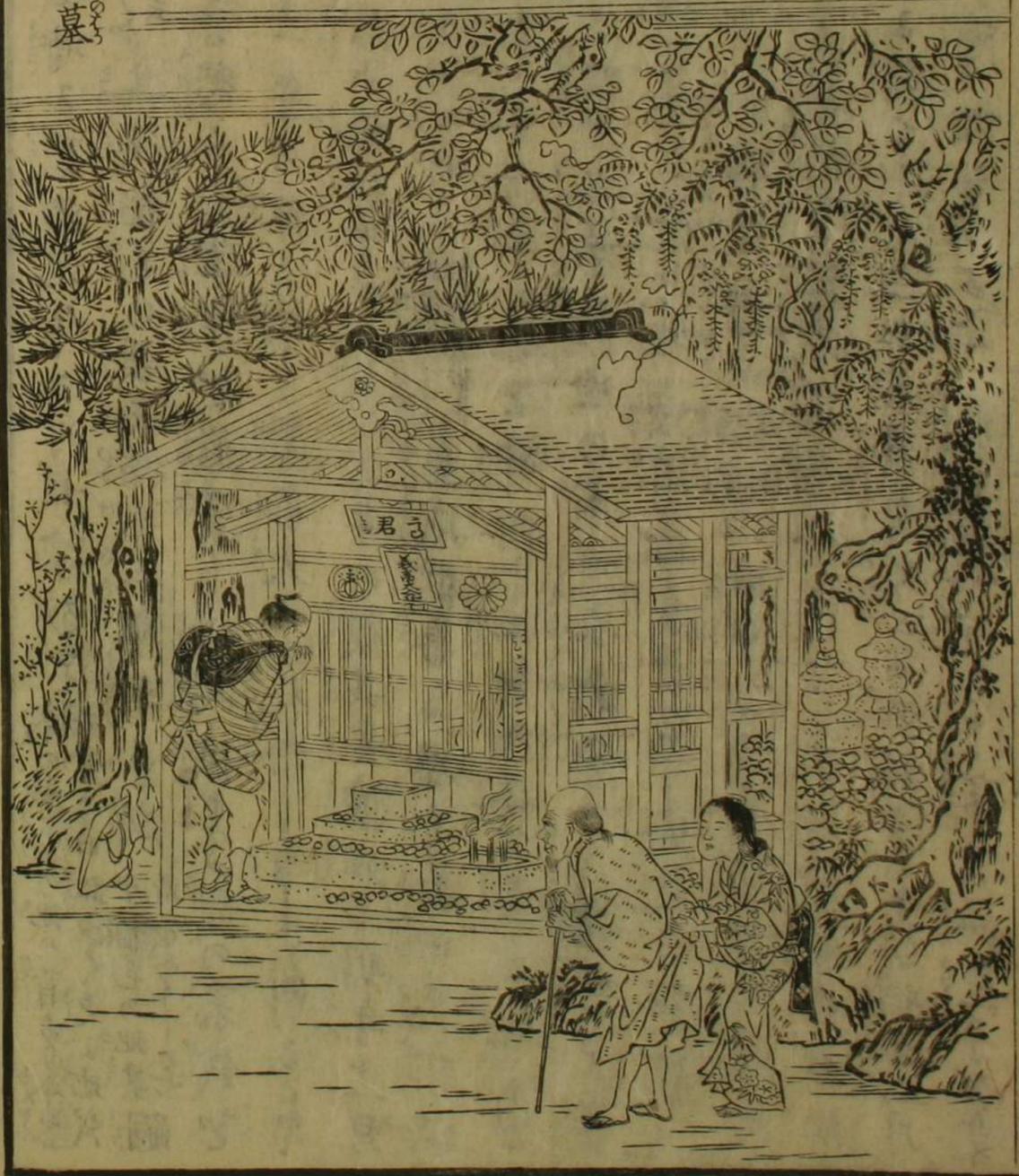
子生山  
 観音堂



院は属を開基の大祖ハ勝覚僧正理源大師本尊ハ如意輪  
観音ゆゑ佛工春日の作一寸八分の座像なり  
縁起曰往古勝覚僧正一夜異僧を夢見るあり然に  
件の異僧告て曰く我ハ如意輪観音なり昔佛工春日  
和州泊瀬の観音を彫刻せし序我形像をも刻し未  
世の衆生を利益せよとわのる然る我海中にある久し  
今武州鶴見川の末生麥の浦ハ漂泊を是我有縁の地  
なり汝開東に至る一字を創立しと安置せよと告めんと  
えく夢さむ僧正ハ奇異の思ひをか直に旅装しと  
此生麥の浦に至るに光明赫爍とく平海の中は  
浪小随つゝ勝覚僧正の掌上に出現し多し時又薩埵告  
て曰く此地乾隅の山ハ安まへし即勝覚僧正當山に登り  
佛意に任せ地をトとく草舎を経営し今の本を安置

せりし時寛治元年三月十八日あり今の所堂の地ハ昔より本を  
改めり其後稻毛の領主稻毛三郎平重成中稻毛の地其嗣  
なると愁と堂宇を修營し諸人供する所の米錢を  
乞く一年の俸に比し晨昏大士へ禮拜し事まのるこを  
恰も君小給仕するうめ三年の後其妻懐妊し明年十月  
一男子を生せり左衛門平重成歡喜に堪む美田三千畝  
山林方一里有半の地を寄附し山を子安と号し院宇を  
植本と稱す爾来薩埵の威力益新中々禱賽も者  
絡繹とく絶む又堀川帝皇子ありゆゑを愁へ  
あひしうハ勝栄僧正勝覚の法嗣此中その威靈を奏聞に  
依り前大納言藤原道房卿をしく其祈願の爲に  
當山詣てしむ三年の後皇妃正に妊娠しあひ明年五月  
太子降誕なりあへし則鳥羽院と申さるハ此皇子あり

義高入道墓



按ふ鳥羽院八康和五年正月十六日  
降誕なり多り五月八日誤あり

帝徽感斜なるに勅して子生山  
東福寺の号を賜ふ遙の後文龜永正の間東國屢兵戦起る

傾大は衰廢せしうとも大悲閣の々々を嚴然たりしあり

寺僧云今に至り寄願ある者當寺本堂小指一楮人供まする所の賽銭を乞年  
限を定め較ぶは給仕と稱し誠信は祈念し難く嗟を給仕の年限満すとまると

仙鶴山松隱寺 東寺尾村ふあり 享保の頃をハ 濟家の禪林に

鎌倉建長寺雲外庵の佛壽禪師開創の古刹あり

禪師八建武二年二月十八日化寂せしめ鎌倉志ある文和 本寺釋迦如來ハ  
三年二月十八日寂とあり此地ハ雲外庵の衆地なり

座像や二尺計あり

慈眼堂 松隱寺よりさ 渡しを丁斗門をゆく小坂を

下を廻り二丁半計岡の上よりあり 本寺十一面觀音

佛工春日の作なり小机札所の一也 松隱寺より

兼帶せし



観福壽寺  
浦島寺とのみ







浦島古変

傳續浦島子傳とに澄江とを按ふ仙覺律師の萬葉集抄より所の丹後風  
土記に美頭乃睿能宇良志麻之古とありて云く浦島子と云く水も澄れ  
義ありて通して云あり

相傳往古 雄略天皇の御宇 日本紀雄略記二十二 丹後國與謝郡管川  
年戊午七月とあり

の人小水江浦島子といふあり 寺記云相州三浦住人水江浦島太夫といふもの  
大裡の役み付てある古書浦島子と作る寺記の浦島子

或ハ太郎をせり續浦島子傳は浦島子何もの人ありてある蓋上古の成  
初り義三百歳を過り形容童子の如し人ありて仙と好秘術と學あり又丹後

風土記ハ日下部百等、祖中々々、簡川の島子と云是及水江浦島子云云

一時七月の事なり小獨小舟に乗し海上に釣し靈龜を得り

其形勢と見え尋常よりありてこれハ怪とあり且何舊て是と

放やり川浹辰ありて彼龜化し一人の美女とあり前の恩と

報んとく島子とて携へて蓬萊山海若神の都に至るぬ

かく後浦島子ハ仙室の筵に侍り常に靈藥の味ひ哉嘗

目小花麗を視耳ハ雅樂の樂を聞觀宴日を送る 日本後記ハ  
浦島子蓬

萬葉集ハ家此而三歳之雨爾櫛毛無とあり これと本土を懐か

心起し獨二親を意たふ神女ハ此を告ぐれハ神女ハ島子

別を意慕ふとも竟止る色も見え縁ハかひなく

一箇の玉匣と與へて云く子遂ハ賤妾と遺れを再ハ

此神仙境へ来らんとありハ必此匣の裏を開きえりありと

島子とて約しとり事外喜ハ彼匣を受傳へて

分ち辞し去る頓蓬嶺の仙都とてとへハとて與謝の

舊里ハ故と着ぬ 日本後記云浦島子天長二年郷小歸る今に至る三百四十  
七年ありと云云詞林采葉抄云島子蓬萊への遊帝王

三十二代を送りて水鏡ハ雄略天皇廿三年と七月ハ浦島子蓬萊へはゆると

たり云く同書傳和天皇天長二年と云く浦島子ハ云く中略雄略天皇の御世ハ

乙巳ハあり又雄略天皇廿三年己未ハあり云云因く考くハ天長二年ハ支

八年なりとされと物換り星移り家園ハ變りて河濱とあり山

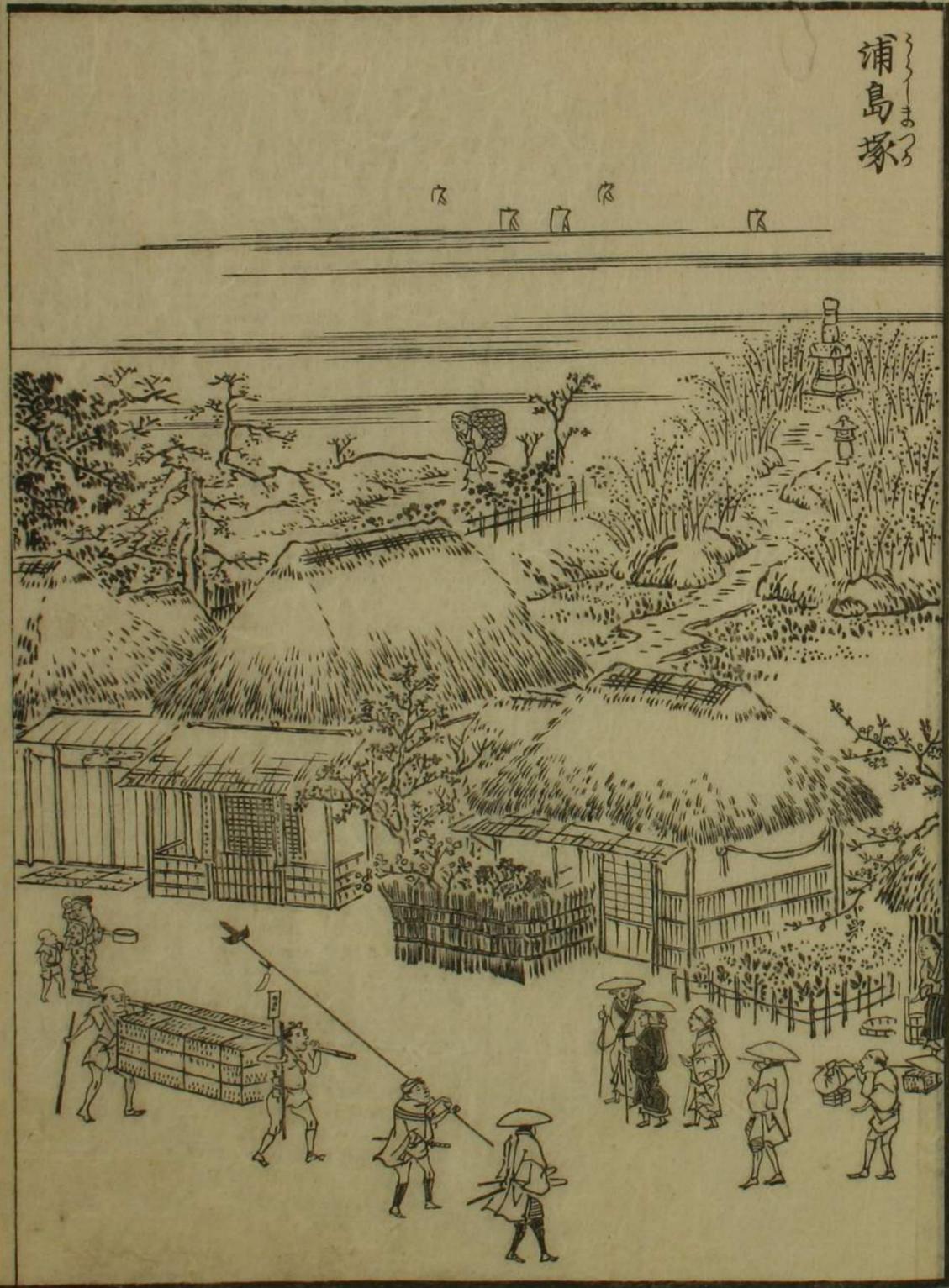
岳ハ改り江海となる荒蕪の間邑煙を絶え舊塘寂寞とて

道路跡ハゆりてあらしみ人なきなりとれハかハ惟しみ

から驚き郷人ハ旧俗の行方を問ふ一人の翁答へて云く昔



浦島塚



水江の浦島子といふもの釣と好舟に乗し海を遊ひ永く  
 家小歸りしとていふも幾數百歳を経るをあるを也  
 續浦島子傳よりいふ衣と洗ふの老嫗ありて田里の古人を問  
 我年百有七歳といふ島子の名を尋ね我祖父の世古老口傳  
 歳を尋ねる傳來語を云く昔浦島子といふ者あり釣を好舟  
 浦島子傳よりいふ蓋海中入りて幾數百歳を経るをあると  
 後記云く浦島子仙化あり於る蓬嶺の仙宮に遊みの間時世  
 遙小隔つて舊里の遷変せしむを悲歎し又仙遊の未央を想  
 像し悲意を堪も前の誓ひを忘れ忽小玉匣を開きこれ  
 裡より紫雲ゆく蓬城とて去るの時  
 其形容忽然とて衰老皓白の人と変を云云  
 絶而後遂壽死  
 神流氷江之浦島子家地見云丹後風土記も島子俄小老翁と  
 時天長二年の約と違へ仙遊再會の期と夫紅流行白鬚を  
 女一諾の約と違へ仙遊再會の期と夫紅流行白鬚を髪を  
 鬚を亂其後金塔の鳴玉液を飲紫霞を餐青衫を服頸鶴を  
 蓬嶺の蓬嶺神鳳の馳と望と時と遠く仙洞の芳流を顧る巖  
 海浦の隠淪神鳳の馳と望と時と遠く仙洞の芳流を顧る巖  
 記せしものゆへに始小兼平二年壬辰四月廿二日勘解由曹  
 延喜十二年庚辰八月朔日

永仁二年甲午八月廿四日丹州簡川庄福田村宝蓮寺如法道場芳命背き難き依る筆跡と願を痕籍は紫毫と馳せぬと  
寺記云後又八十歳の終を持ちて再び海神の都に入ら  
しつる諸書の抑當寺ハ淳和天皇の勅願ゆゑ凡九百七十有  
餘年を歴る古藍とて同帝弟四の妃ハ浦島子ハ九世の  
孫なり妃深く佛乘に帰しあひ帝ハ告ぢりて空海阿闍  
梨小計と檜尾僧都實慧とて是を司り免梵宇宮構  
ありて真言の密場となりあひ元亨釋書云如意法尼ハ丹後國余  
佐郡の人十歳中一王都ハ弘仁十三  
年帝靈夢を感しあひの後花使とて妃とゆひ妃深く佛道ハ常ニ如  
意輪とて敬重をうくる一巻と蓄入るの裏とて空海妃の選と捧と秘奥と修とあふ  
大平野を守敏空海後先相競り法雲と祈り空海妃の選と捧と秘奥と修とあふ  
雨澤天下は俗に妃の同国水江の浦島子と云ふのあり妃ハ先ハ教百歳久しく  
仙那小棲む天長二年あつて浦島子とて妃の持おの選と紫雲選とて空海  
師佛像を刻む時ハ妃像を蓮の中にとてとて同書の論ハいそぐ妃の選恐りて  
神島の器はあつて蓮の一寶の何とてとてとて其の秘蹟なり  
浦島子ハた蓮瀛の一寶の何とてとてとて其の秘蹟なり  
破も悲躰雨ふそき朝の霧夕の月ハ香の煙と燈の光とよ  
かゝる仍も唯機縁感應の時と期をもつ然るも應長正和の

項鎌倉光明寺弟二世寂慧上人記主の家弟ゆゑ白旗故郷白  
流の大祖ハ侍らるる累す  
籬へ往来も毎小當寺觀音へ詣り守者もあつて歎き法弟  
慧光上人姓六森氏  
相州人とて住持とて二度寺院と宮建あり  
とて浄業の精舎とせしやりのと

神奈川驛東海道五十三驛の一なる行程河崎より二里半あり  
此の記梅花無尽蔵鎌倉大草依等の書皆神奈川ハ作と園大層ゆと狩野川ハ作と  
本宿新町より西の町迄  
四町の間の惣名青木町等の名あり滝の町より下臺迄の  
間六町の惣名あり又臺あり  
向控井澤と云地迄とて神奈川驛と云へり  
平安記行 わのつとて

梅 花無盡蔵 文明十七年己巳  
神奈河二小春出世戸井赴江戸途中有老松蟠屈其  
形如竜其処号鴉森  
神奈民麿板屋連 深泥没馬打難前  
鴉森春動卧松老 未入飛竜九五乾



神奈川  
の  
總圖





其二



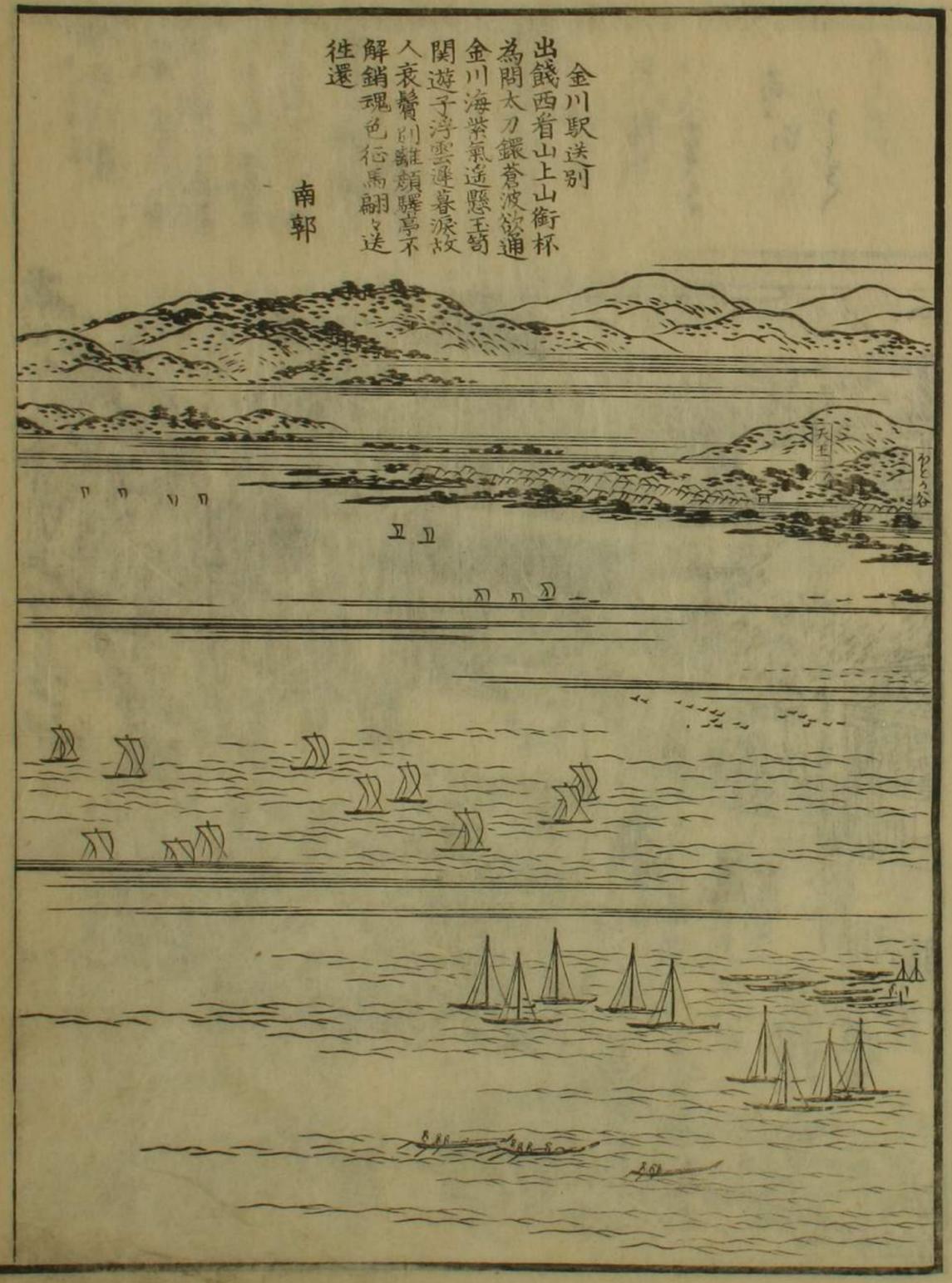
其三

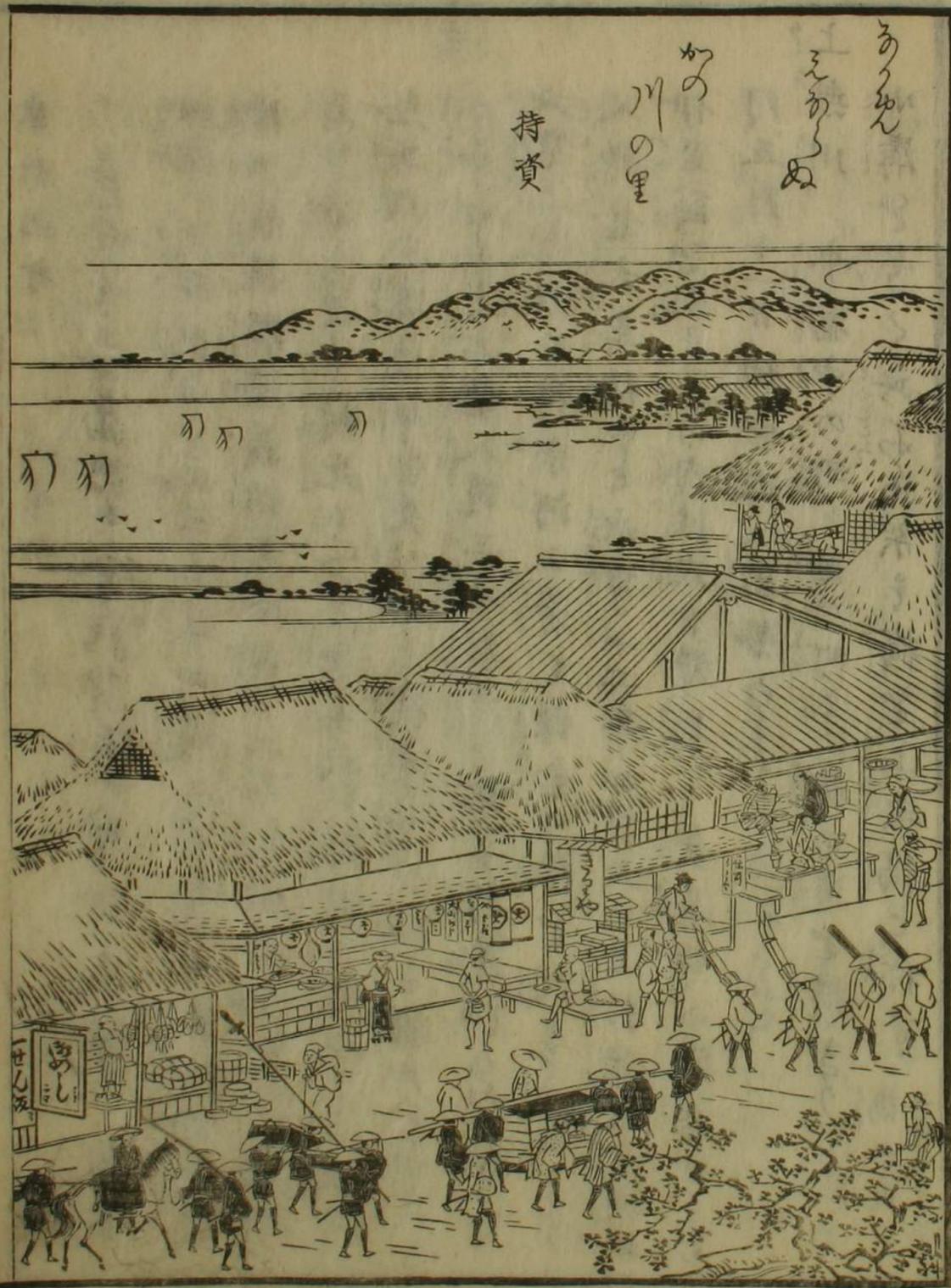


三ノ百十一

金川駅送別  
出錢西着山上山銜杯  
為問太刀鏢蒼波欲通  
金川海紫氣遙懸玉騎  
関遊子浮雲遲暮淚故  
人衰鬢別離顏驛亭不  
解銷魂色征馬翻送  
往還

南郭





持資

川の里

あつゆん  
えあゆぬ



神奈川臺

此地ハのりも海  
岸ハ臨ミて海亭  
をもちけ往來の  
人の足を止む此  
海辺を袖の浦と  
名づく

平安記行

あま

ゆめ

新橋

よこ

あち

しき

浮世を渡る流遊人をして流るるの如くゆりて

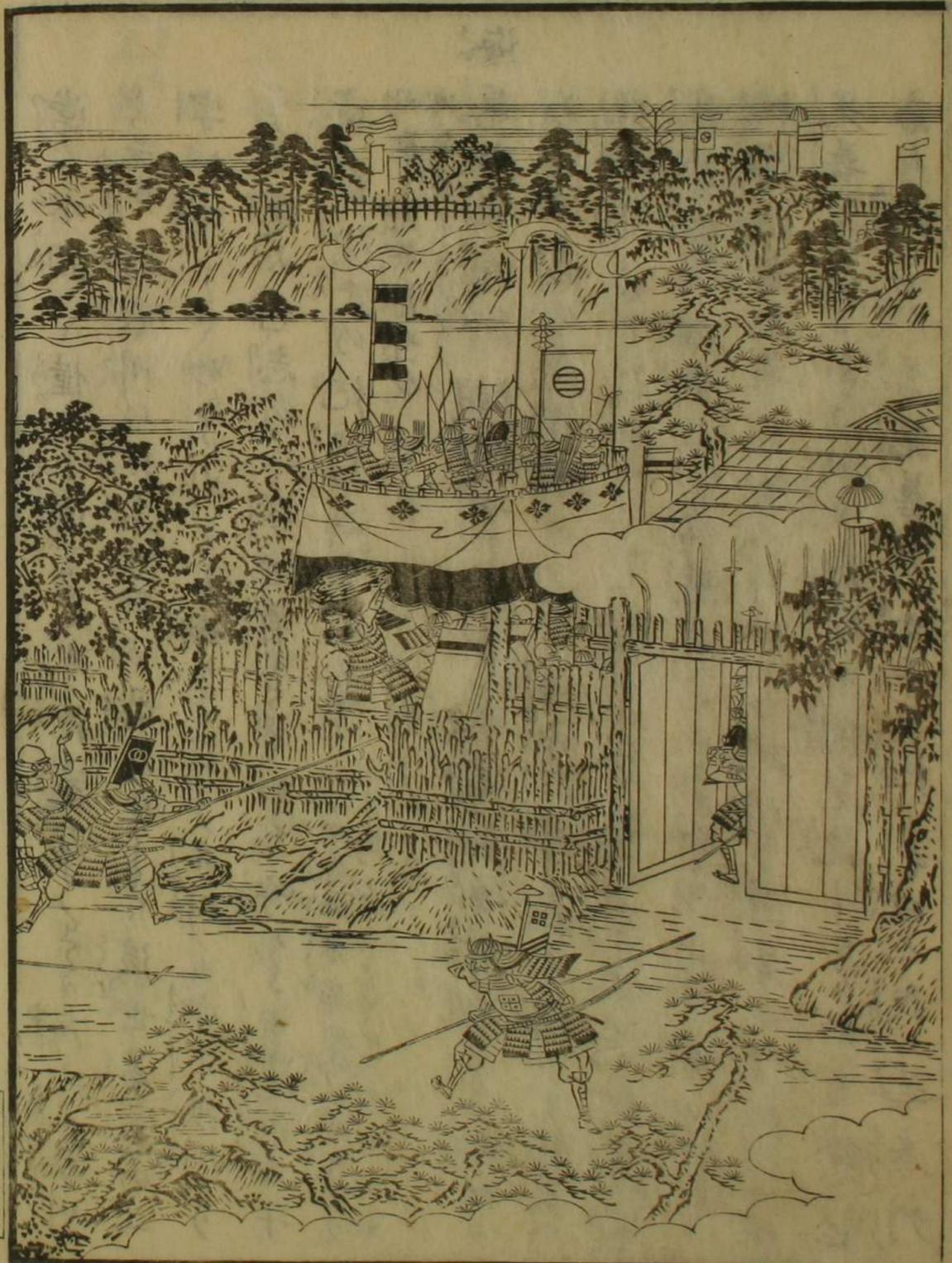
澤庵

此地ハ大平記ゆゑ正平七年の閏二月廿日の武蔵野合戦ハ  
 新田義興服屋義治兄弟終ニ二百餘騎ヲ打たされ落行  
 るき方もなす一討死せしき命あれハ鎌倉へ打入る足利  
 左馬次小達之命を失りやと夜半過る程ニ開戸を過るハ  
 途中ゆゑ石堂入道三浦助等の勢ニ行違ひあひ馳る  
 此勢と打連て神奈河ニ著て鎌倉の様を問ふ由りゆ  
 又鎌倉大草紙ゆゑ永享十二年四月六日上杉修理大夫持朝  
 伊豆國を立る山の内北庄ニ歸恭一長尾郷ニ滞留せしめ  
 同五月十一日神奈川へ出勢ありしゆゑ  
 上無川 本宿中の町と西の町との間の道を横きりて流る  
 小溝を号く此所ニ架き橋を上無橋と稱す 橋の長さ  
 二間小くとも

常ハ水涸る僅の小流なり水源定なる所ハ上無川  
 と云則神奈川の地名の興る所以ゆゑ後世炎志の二  
 字を略ししゆゑ川とを云るなり品川も亦下無川あり  
 しと是も毛志の二字を省きしゆゑかく呼ぶ由寛永五年  
 齊藤徳元の紀仍小く見えあり  
 小田原北条家の今限帳  
 知野彦六といふ人武州神奈

海運山能満院 満願寺と号す本宿荒井町道より右側ニ  
 あり古義の真言宗ゆゑ鳥山三會寺ニ属せり開基ハ  
 内海光善といふ人なり関山ハ重運と号す本尊虚空  
 蔵菩薩ハ海中より出現ありし三寸九分の靈像あり  
 相傳正安元年己亥八月十三日此地の漁者ニ内海新四郎  
 光善といふ者あり此日海中ニ網を沈しし此靈像を  
 あり然るに光善の女子ニ托して曰く我ハ是房州

北條上杉  
神奈川闘戦





清澄寺の淵伽井ありて七百有餘歳を歴り今此地の有縁ゆかり移り汝堂宇を営む我像を安置せよ必子孫を幸福ありとめん

洲崎明神祠 海道の右側あり普門寺別當より安房

命を祭ると源平盛衰記は洲崎明神ハ八幡大菩薩を祝するともハ兩説を擧ぐ疑と存也

熊野権現社 神奈川本宿町海道より右ゆあり別當ハ

滝の橋 本宿西の町と滝の町との間海道を横きり流る

川は架を此橋下の流と滝の川と号く故ふる水源を七八町西の方堰村と云より祭まの流あり

橋本宗興寺橋より向ふの川添平町より西の方道より

左小ありと曹洞の禪宗中々同所本覺寺ハ屬せり

本尊釋迦牟尼ハ定朝の作りて一尺より座像あり

觀音山 山頂ハ觀音堂あり故ハ山の号とせり宗興寺より

令せり石燈篋立し寺ハ徳門の正中に對し

本尊正觀音の像ハ毘首羯摩天の作り五寸九分あり昔焼亡ありその日記を失ひぬ今其来由とあり

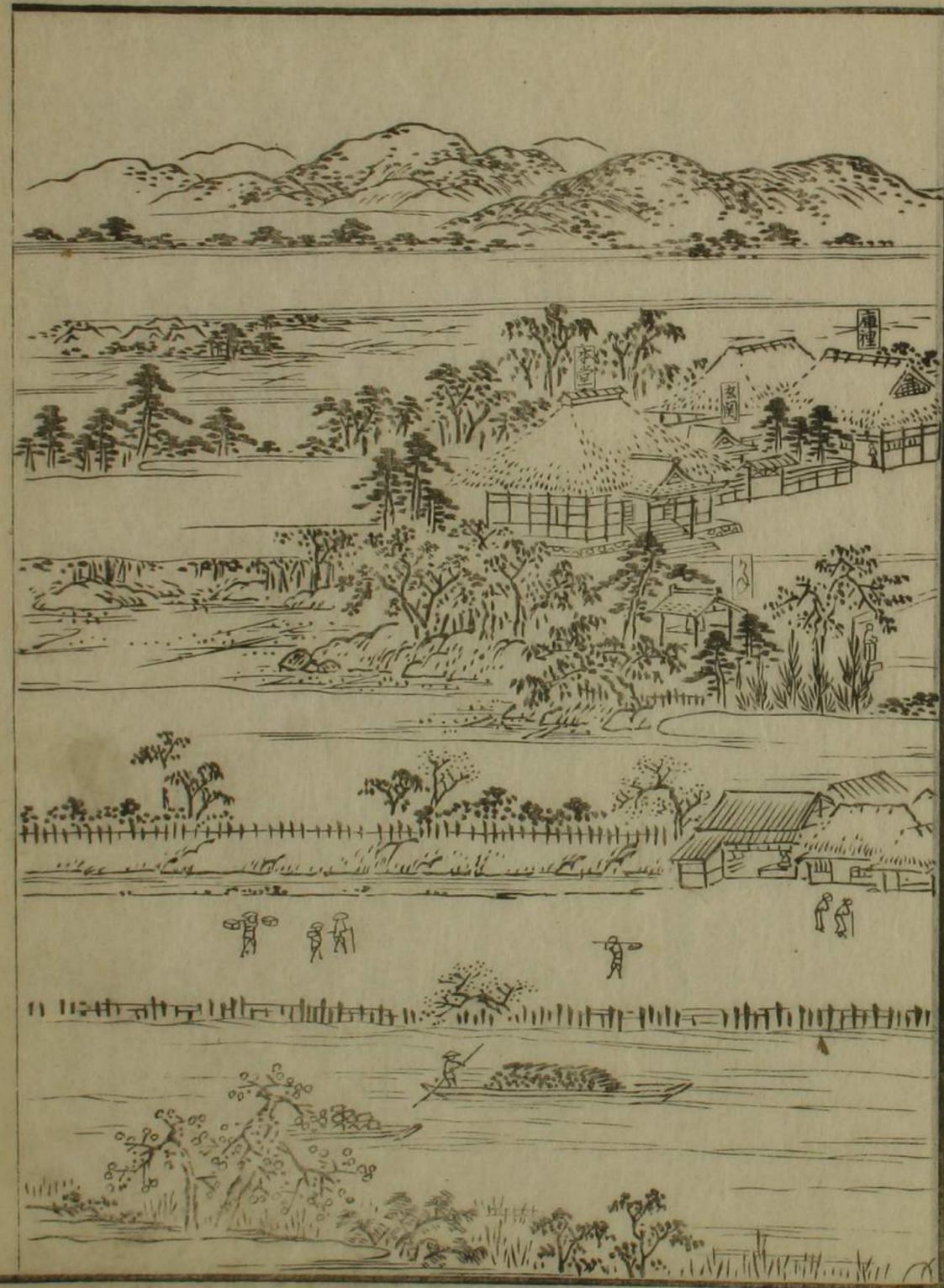
洲崎明神



観音山



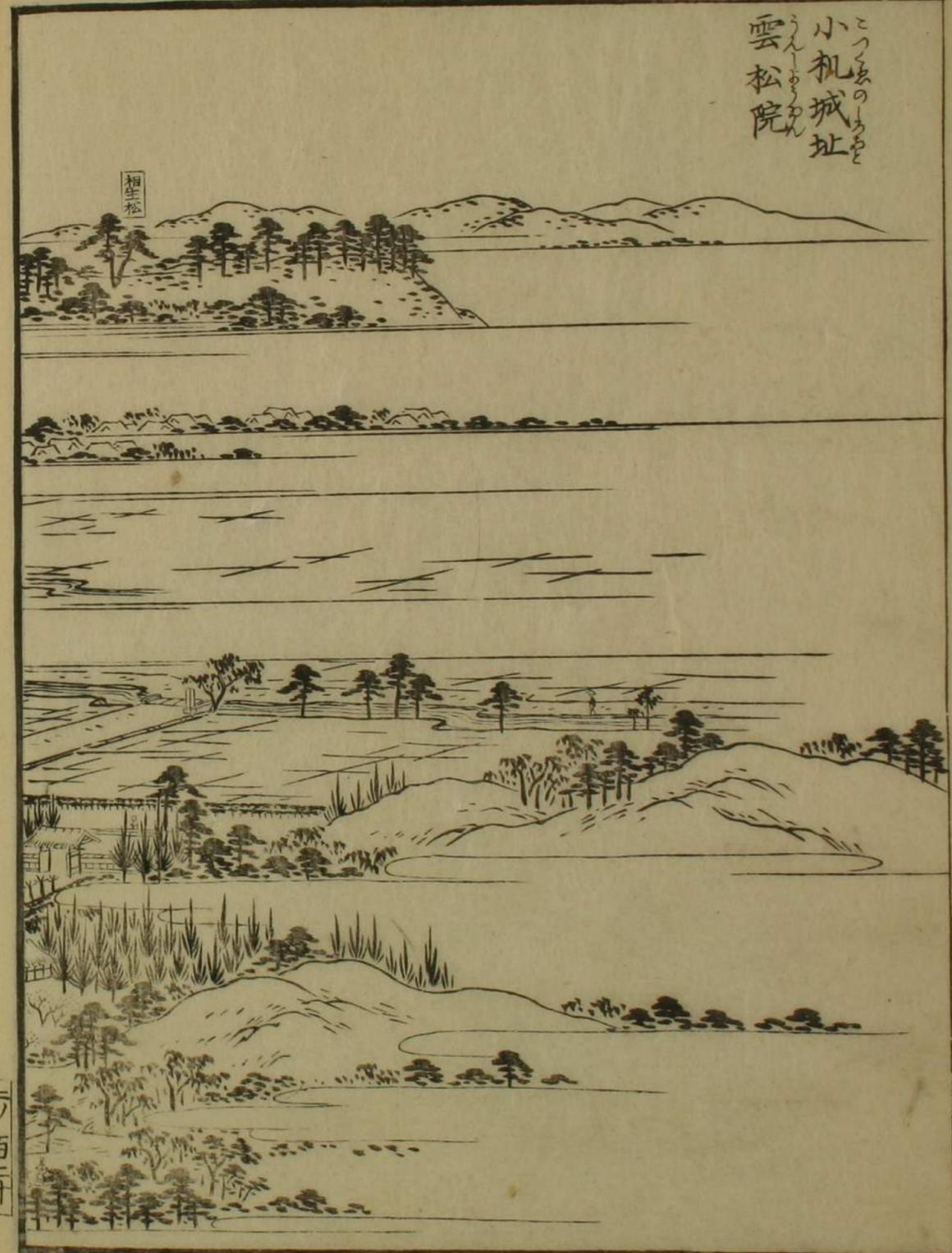
熊野推現山 観音堂の山續めく堂の左の方必し高き  
 地小形くわりある草祠あり往古小田原北条家の功臣間宮  
 四郎左衛門の城壘の址なりと云前條の本宿町海道邊  
 より右よ付ふ所の熊野推現社とのあり或は此社を移して  
 其跡へこの草祠を置く旧地を存せしめや小田原記より  
 永正七年の秋七月上杉治部少輔入道建芳々被官上田  
 藏人と云し者謀叛を企て北條早雲よ一味し武州神  
 奈川なる熊野推現山を城廓に構へ楯籠る依り治部  
 少輔自大将とく管領より加勢成田下總守洪江  
 孫次郎藤田虎壽丸大石源左衛門長尾孫太郎々名代  
 矢野安藝入道長尾但馬守々名代成田中務丞外  
 武蔵の南一揆をかり催し同月十一日推現山小走向ひ  
 同十九日追責戦ひ終り城を落せしめ此地のより



慶雲寺







こつとあつた  
小机城址  
うんまきわん  
雲松院

言之則有陰陽晝夜之分在人而言之有迷語聖凡  
 之別蓋以我佛垂慈教六利有情同圓覺性故又  
 利生為事然而種種隨機導德曷勝言哉茲有  
 設鐘聲佛諦技濟淪稱其功德曷勝言哉茲有  
 武州都築郡小机庄根源屋鄉臥龍山雲松院住持  
 別峰者曹洞之末孫大源汎遠州高尾石雲院之  
 并新葉也於是歲而施鐘於其梁因質余銘而記之就  
 銘曰  
 舉世皆暗幽惟鐘是明明聲傳法界響徹幽冥  
 幽處聞鐘幽處皆明明通幽處幽處無形  
 聞而返聞行願速生成無盡含識俱登化城  
 恩遍六道利極四生無盡含識俱登化城

于昔天和龍集玄貳閻茂季春如意珠日  
 臥龍山雲松禪院現住宗蘊代置之  
 武藏國豐島郡之長谷川刑部國永作  
 東臯心越杜多稿  
 家御鑄物師國永作

小机城跡同一通道五丁計を隔て道あり右の方城坂と云せ

二町沙登くある土人ハ城山と号せり今官林とせ小田原記小

天永四年甲申正月十三日北条氏綱上杉朝興と攻落し

歸陣の後小机の城を普請ありと記せし依老臣笠原

越前守同能登守父子を城代とせし此所ハ居住せし

むとたり封境今南北一町余東西四町計の小阜にせし

回り小建の形を存せし高六七中心の平地幾し百歩

たりとあり今畠とせ古ハ橋樹郡都菜郡ハあり又笠原

家の臣沼上出羽とつる人の子孫今此地ハ存せ其家ハ

刀劍の類と収むると云内井田の地と領せし人ハ小机ハ羽

某くを云あり又同書ハ笠原藤左衛門とつる人ハ小机ハ羽

高田玄蕃助ハ小机常生の内と領し笠原平左衛門とつる人ハ小机

師岡の地名と注しハ越前守の氏族なりとあり

白山権現 城山の東池山麓ハあり古の鎮守ありと云傳ふ

松龜山泉谷寺 本覚院と号し城山より五六町と隔て長津

田通道の左ふあり大門口三丁計、間左右に櫻の列樹あり

此地の石名と泉谷と浄土宗ゆゑ花洛智恩院に属せり本

尊ハ一光三尊の阿弥陀如来本像ゆゑ二尺八寸計あり

作者あらくは當寺ハ鈴木但馬守とて人の開創あり

此の開山と名蓮社見譽大道善悦大和尚と号す弘治元年

八月二日弘徳寺の下徳飯沼中門の前ふ天正十八年小田原北条家より建

天正十八年此制札あり

淡島神社 相模街道大熊村を左へ十三四町入る折本村ハ

ありと神主雲路氏奉祀を祭禮ハ二月三日縁日ハ毎月三日

十三日ゆゑ祭神ハ少彦名命及び神功皇后二座なり勸

清の初ハ詳ありと云

櫻樹 神前東の方あり昔土人此山に入櫻の老樹を薪とせんとし

伐りてを徑く後山よりせんとす至りては櫻の老樹の傍ハ

大蛇あり其樹を憐れむと似て里人あつては恐怖し後ハ其

樹を憐れむとて宝永の徳の改められしに今神前の西に移たり

其根社東にありとて宝永

淡島神社之碑

寛保壬戌夏折本の邑長藤原英至とて人邑民共謀り當社を新

せんと然とて此の地ハ松下某公の采邑あり英至此の地を告

請ひ書を鳥石山人より求む義額ハ本多康桓竜の画ハ古山平國豊の

其文ハくふ着きくあり

多目周防守宅地 青木町の中ありとおぼしけれと其地定あり

小田原記信玄小田原と襲あり条下多目周防守との項

青木とのつゝ居住しり

小田原城あり上州の國峯岩倉若落古戦録小田原の條下は

北条家の領あり

北条家の領あり

北条家の領あり

北条家の領あり



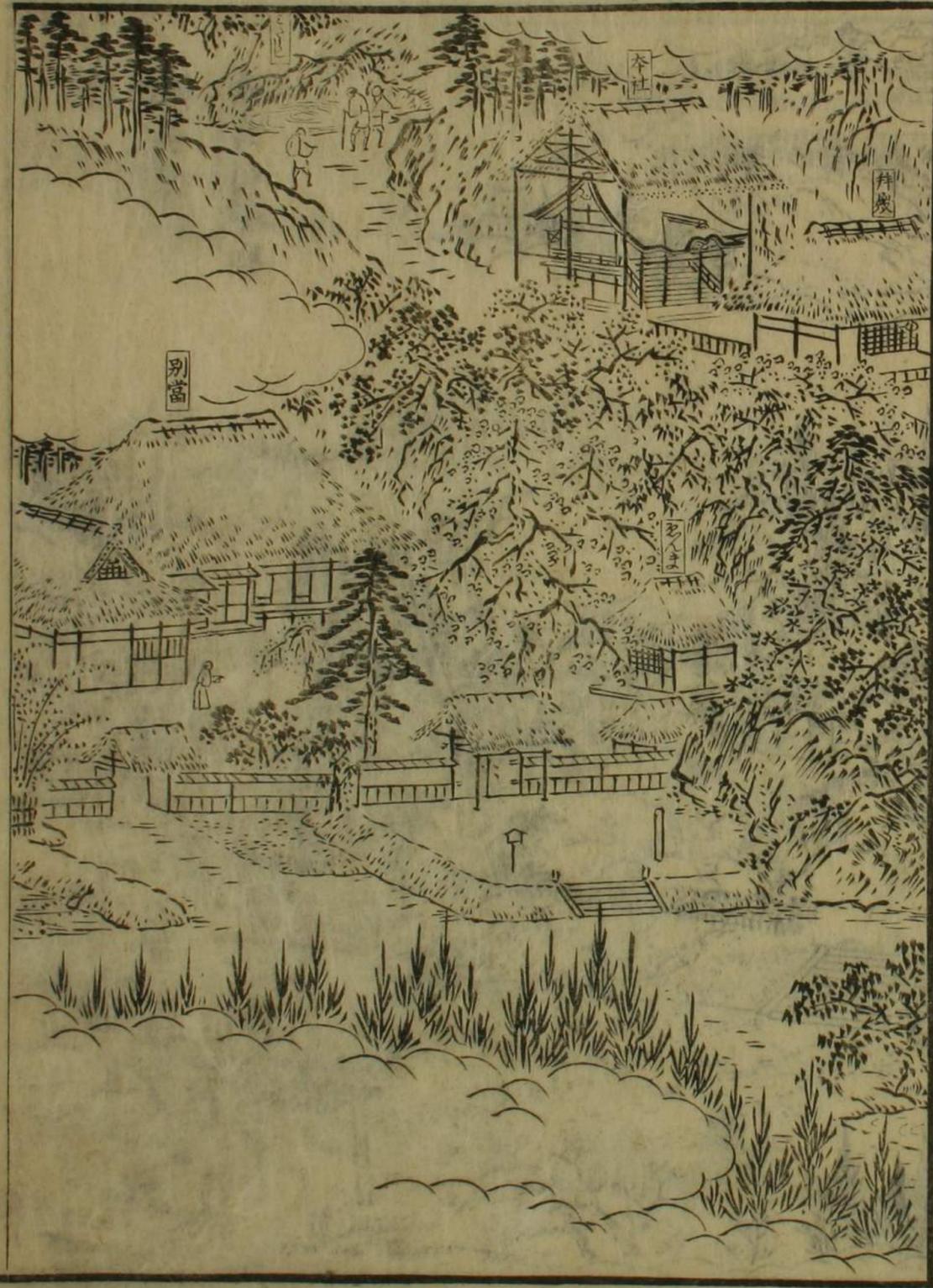


原吉住

泉谷寺



二百二十三



師岡  
熊野権現宮



折本村  
淡島明神社

青木山西向寺 同所青木町の横小路の右側ありと虚無僧寺に

普化宗門金洗派と称せし物

本覚寺切通 同所本覚寺の北の方の間に切開ききく道路と

張津田通道及三澤 永正七年の秋上杉治部少輔入道建芳

村等への路なり 被官上田蔵人建芳は背き此地に打く出熊野権現山を

城廓に取立西に續きたる山と其間を八堀切本覚寺

の地藏堂と根城とせしよし 小田原記に云えり 権野

山の条下と

青木山本覚禪寺 同所の南七軒町ありと曹洞の禪刹にして

小机の雲松院は属を本寺の地藏菩薩一尺四五寸の立像

なり 相傳ふ當寺は嘉祿二年の開創なりと其後天文紀元

の年曹洞大源の末流季雲四傳の法孫陽廣禪師此に

住初く法幢と建て禪風を起す 元禄の初殿堂に佛殿の

額に本覚禪寺と書せしを圓明寺の開祖道和尚の筆なりと

圓明山陽光院本覚寺の南に隣る遠州可睡齋退院の地

に曹洞の禪院なり 開山教特賜本然圓明禪師と号

石牛天梁 後の山を福聚峰と号し門の額に福聚望と書

和尙と号す 永平圓明禪師の筆なりと

道灌山 同所西の方北山中の字なり 昔大田道灌入道此地に

城を構へしありの号ありと云

飯綱権現社 神奈川臺町海道右の山上ありと本覚寺あり

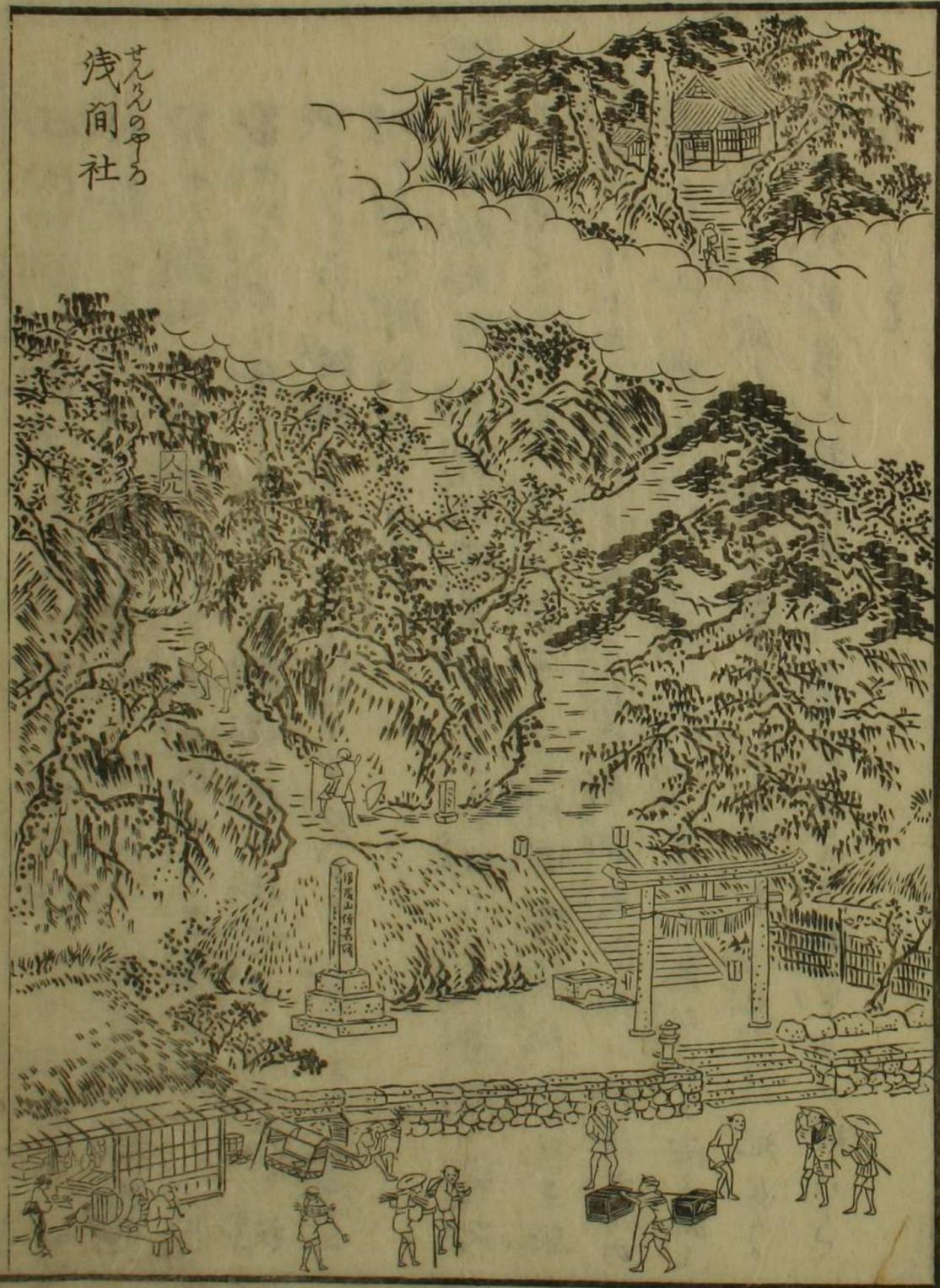
一町斗南ありと別當八真言宗同所の萬年山普門寺奉祀を

祭礼ハ五月十七日なり 飯綱権現本地佛を不動明王行基

大士の作なりと座像一尺七寸並跏ハ大山祇命といふお傳ふ

右大将頼朝卿此の像と深く崇敬なりといふ 治承四年

浅間社  
せんまのやち



富士浅間祠 同所の南芝生村海道の右の方山の中腹にあり

八月伊豆國石橋山敗軍の後安房國へ渡海の時本宮の  
 靈たま尔りより風浪の難と逃れあひ其後竟つひみ天下第一あ統とうあり  
 あひりハ文治年間此地に宮社造営ありく神領等と寄  
 らるありしと云々遙の後大田道灌此地よりりて尤も信厚  
 かりしと云

袖そでの浦うら 此地の光景長汀曲浦さびく袖の形も似くあふ名  
 とく鳥丸大納言光廣卿關東下向の頃帰路に再此地  
 よきりあひく和歌を詠せしる  
其時みづくを深み詠弾ハ此地  
 江戸屋何某ク家に秘免置り

こゝに袖の浦と泊る

あひき也神の河派とわくく核をまぬくハ 光廣

按あ黄葉集わうはつしゅうに初五文字とあまちのあきく結句のとをとやより黄  
 葉集わうはつしゅうをわくく傳写のあきりあり

保土ヶ谷天徳寺とつる真言寺の持なり此地に一の  
暗窟あり上俗是を富士の人穴と号く相傳昔頼朝卿  
富士の裾野小浜獵ありて頃仁田四郎忠常は余せし  
富士の人穴の奥を究りて忠常終小此穴中に入りて抜  
けりとの誕譚ありとるなりとてとて古くより云傳る

洲おと乾せん辨はん財さい天てん祠し芒の新しん田てん横よこ濱ま村むらよあり故ゆ小こ土と人じん横よこ濱ま辨はん天てん

とと稱せし別當ハ真言宗中々同所増徳院奉祀を祭  
礼ハ十一月十六日なり安置せし所の弁財天の像ハ弘法大師の  
作中々江の鳴と同本此地ハ洲崎中々左右共海に臨み  
海岸の松風を波濤は響をうらを尤佳景此地なり  
海中姥島なと称する奇巖ありて眺望せしむ  
秀美なり

